令和４年度奈良市教育委員会施策評価懇談会の意見の概要	
開催日時	令和４年　７月２５日（月）午前１０時から午後０時３０分まで
開催場所	オンライン会議
意見等を求める内容等	・ 意見交換 ①コロナ禍が児童・生徒に与えた影響について ②with コロナの教育のあり方について ③ICT 教育について ・ 外部評価者の質問・意見に対する対応の確認
参 加 者	【外部評価者】仲林　真子、橋崎　頼子　【計２名】 【教 育 委 員】北谷雅人教育長、畑中康宣委員、柳澤保徳委員、 梅田真寿美委員、川村由加里委員　【計５名】 【事　務　局】五味原教育政策課長、沖本教育政策課長補佐、 松浦教育政策課長補佐、教育政策課職員１名　【計４名】
開催形態	公開　（傍聴人０人）
担 当 課	教育部　教育政策課

意見等の内容の取り纏め

項目 No.１「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.２「教育委員の活動」について内容確認の後、外部評価者と教育委員で意見交換を行った。

≪意見を求めた内容及びそれらに対する意見等≫

１．外部評価者の質問・意見に対する対応の確認

項目 No.１「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.２「教育委員の活動」について、質問・意見がないことを外部評価者に確認し、了承を得た。

２．意見交換

（１）コロナ禍が児童・生徒に与えた影響について

（北谷教育長）

令和２年度に新型コロナウイルス感染症拡大による学校の一斉臨時休業があり、心のケアを行うことを目的として、本市の小中学生を対象に「生活調べアンケート」を学期毎に実施しており、令和４年度１学期の調査で７回目となる。回答結果については、集計・分析したものに加え、児童生徒個々の回答を各学校にフィードバックし、児童生徒への直接の指導にどう役立てるのかということを協議しながら行っている。

回を重ねているため、ある程度大きな傾向を見て取ることができ、例えば令和３年度の１学期と今年度の１学期において、質問９「悩みごとを話せる人や場がある」、質問 10「困ったときに、学校の先生や家の人に頼ることができる」の項目で 75％～80％の児童生徒が肯定的な回答をしていることが分かる。

質問 8「毎日が楽しい」の項目でも、肯定的な回答をする割合が少しずつ増えてきている。質問 11「学校や家で何か不安を感じたことがある」の項目でも、不安がある児童生

徒の割合が減少しており、児童生徒の心理的安定が読み取れる。
質問１「朝ごはんや昼ごはんを食べている」の項目においては数値に大きな変動はないが、２～３％の児童生徒が「あてはまらない」と回答しているため、生活習慣なのか、親が食事の準備が出来ていないのか、背景をしっかり探る必要があると考えている。
質問９「悩みごとを話せる人や場がある」において「あてはまらない」「あまりあてはまらない」という子どもが 20％前後おり、そうした子どもたちがいることを見逃してはいけない。全体的に安定しているから良いのではなく、そうした子どもたちの対策をしっかり取り組んでいかなければいけないと考えている。

（仲林評価者）
大変興味深いアンケートである。質問項目はコンパクトで適切かと思う。コロナ禍をきっかけに調査を始めたのか。

（教育長）
コロナによる学校の臨時休業の時から時期を決め継続的にアンケートを取っている。

（仲林評価者）
コロナ前との比較ではなく、コロナ後にどう変化したかという理解でよいか。主観になるが、教育長がおっしゃるように、思ったよりも肯定的な答えが多いことに少し安心した。
一方で、「悩みごとを話せるか」について、否定的な回答が小学生で 25％以上あり、多いような印象を受ける。「何か不安を感じる」という質問は重要であるように思う。コロナは子どもたちにとって得体のしれないもので、何か不安を与えるようなものと思っていた。再開後すぐの小学生の数値は否定的な回答が 10％程度であるが、1 年後になると増えてきているというのは、得体のしれないものに対する不安というよりは、いつ終わるかわからないという不安が増えてきているのではないか。

（畑中委員）
コロナ禍によって、友達や先生と接する機会が奪われるということは、児童生徒に与えた影響は非常に大きいと感じる。アンケートで肯定的な意見がある中、２割の児童生徒にとっては話せる場所がないとのことである。コロナ禍だからということでもないかもしれないし、休業中にアンケートが行われたのでさらにこの数が多くなっているのかなと感じる。学校というのは相談できる相手と会える貴重な場所だと思っている。
子どもたちや保護者から聞いた話だが、部活動を頑張っていた子どもが活動を制限されて目標としてきた大会が中止となる、そういった中で精神的にも辛い時期があったということである。保護者のフォローもあったと思うが、子どもたちが自分なりに考え、もう一度自分を見つめ直し、前を向いて自分に出来ることをやっていこうと、自主的なトレーニングを続けてきたという話を聞かせていただいた。コロナはマイナス面が非常に大きいが、自分に出来ることを考えて実行してきた子どもたちもたくさんいることを知った。コロナ禍が子どもを強くした一面もあるのではないかと考えている。
課題として SOS を発信する力ということが挙げられているが、これも大切なことであると思う。不安な中、どうしたらいいのかという答えを求めるだけではなく、自分の中の悩み、相談ごとをしっかりと相手に伝えられる、相手の話を聞いてあげられるというのは、子どもたちにとって大切な力である。

（仲林評価者）
部活動が私生活の中心であり、そこで頑張ろうと思っていた子どもたちにとっては、本当に辛い時期だったのではないか。記憶では、授業が一部再開されたとしても、団体競技の再開は後回しになっていたと思う。

（川村委員）
コロナ禍が始まった頃、地域の民生主任児童委員に親が叱っている声をよく聞く、心配している、という話を何度か伺ったことがある。私は図書ボランティアや授業のサポートにも入らせていただいているが、そこに親が参加するようになり、親同士で話をする場ができたことにより、親の叱る声が聞こえなくなって子どもも落ち着き、笑顔が増えたということがあった。コロナ禍は子どもに対しても負荷があったが、大人にとっても閉じ込められた環境の中で息苦しかったと改めて感じている。
このようなアンケート結果は学校だけに留めるのではなく、家庭や福祉等他分野と連携した形で、子どもを地域・行政が協力し育てていくという形の資料になればと改めて思う。

（仲林評価者）
年齢が小さくなればなるほど、大人の不安や余裕のなさが大きく影響を与え、何か分からない不安感やそわそわする感じにつながると思う。

（梅田委員）
学校の中では子どもたちの体験や経験が非常に制限されたということが、子どもたちに与えた大きな影響であるように思う。
例えば、大きな学校行事である修学旅行や遠足、異学年での交流の場、先ほども出た部活動等が制限された。運動会や学習発表の場、音楽会、作品展、参観日、全員が集まる朝礼等を学校が持てていない、制限されている状況が続いている。学習面においても、ICT の活用等によってフォローしていくということもあったが、協働学習の行いにくさということも実際あった。また、防疫対策として音楽、家庭科、体育の指導の一部を行わない、または時間や場を制限するなどというガイドラインが降りてきたこともあり、子どもたちへ与える影響が少なくて済むよう各校で苦労をされた。子どもたちが適切な学年で経験することが求められている内容を経験しないまま次の学年に上がっていくということも起きている。その結果、資質能力という面で考えると、コミュニケーション能力や問題解決能力、物事を企画立案する力を身に付ける機会、また異学年交流が無いことによるリーターシップを発揮する機会が奪われたことが大きかった。小学校高学年の２年間でコロナ禍であった子どもたちは、高学年で異学年の関わりや学校外での活動を経験せず、中学校に進学したことによる影響を中学校の先生も感じていると思う。しかし、学校ですべて受け止めなければならないという状況ではなく、どのような心理面での影響が出たのかというアンケートを教育委員会で取り、各学校に返していき、各学校でどのような支援が必要かを考え、学年での指導や個人への指導に生かせている。

（仲林評価者）
同じことが大学でも言える。高校２、３年で本来その年で経験すべきことが抜け落ちて大学に入学してきた子どもたちは、人との距離感が掴みづらいような印象を持っている。

学生部の部長をしており学生のトラブルに接する機会が多いが、人との距離の取り方がわからないから起きてしまうハラスメントが増えているという実感を持っている。

（柳澤委員）
継続的にデータを取っていくことが学校の先生方にとっても力になると私も思う。
ネガティブな回答が常にあるということを前提にケアを考えていく必要がある。
例えば「毎日が楽しい」という項目について、部活動が楽しいということなのか、友達と一緒に授業を受けることが楽しいということなのか、家庭が楽しいということなのか、様々なファクターがあると思う。継続的にアンケートを取っているため質問項目をアレンジすることは難しいが、家庭に問題があるのか等色々な解釈ができてしまうことから、何が楽しいのか掴めるような仕組みがあれば良いのではないかと思った。
教育委員会から学校の先生方に対して６点ほど取り組み方の例を挙げているが、それぞれの学校のスタンスでリライトするなどして今後の改善に取り組んでいかれると良いと思う。

（仲林評価者）
相談できる相手が誰なのかという質問があればさらに参考になると思う。

（橋崎評価者）
子どもたちは言語化することが難しく、イライラする、集中できない、体の調子が良くない等間接的に精神的な不安が現れているのだと思う。取組として話を聞くという関係性を重視することをしておられるので、そのとおりであると感じた。
川村委員が言われたように、大人にとっても非常に辛い時期であったというところで、子どもたちに関わっておられる先生方のケアというところも非常に重要である。親である教員の方もおられるので、２重３重の役割を担いながら子どもたちをケアしている教員のケアも考えていきたいところである。

（仲林評価者）
教員は自分も感染してはいけないし、自分の子どもも感染させてはいけないし、自分のクラスの子どもたちもとなると、相当大変だろうと思う。また、ICT も一気に導入したということで、教員も小学生、中学生も大変だったろうと感じている。

（２）with コロナの教育のあり方について
（北谷教育長）
教育長として継続して校長先生方にお伝えしてきたことは、もうこれからはコロナ前の学校には戻らないでほしいということ。これからコロナが急になくなることはないので、黒板を背にノートを広げ、そして子供たちを前に向かせて、従来型の教育をするということはできないと伝えてきた。それと同時に、今まである学校の当たり前を１つでも２つでも必ず見直してくださいということもお願いしている。極端に言えば、修学旅行や運動会、今までやってきた朝の職員の打ち合わせなど本当に要るのかということである。いわゆる学校にあるものすべてを校長先生提案型でしっかり議論をしてほしい。
オンライン化は市としてタブレット端末やそれに関する機材をいち早く用意し、先生方の尽力もあり、急に休校となっても、すべての学校でオンラインの授業ができるという体制が整った。これからの with コロナのあり方としては、多様な学び方を創出する必要

があると思う。今までは不登校の子どもたちを中心に学習支援としてオンラインを使っていたが、感染不安で登校できない子どもたちも当時かなり増えた。感染が拡大時には、蜜を避けるため教室一か所に子どもたちを集めず、理科室に分散して中継をして授業をしたこともあった。
また、世界遺産学習では、今までは現地に行くためにバスをチャーターしなければならなかったが、現地から学芸員の方がオンラインで中継をする形になった。しかし、それだけでは本物に触れたり、スケールを感じ感動するということが薄まってしまう。
今後、教育のすべてがオンラインに置き換えられるとは思っていない。ハイブリッド型でどのように構築していくのか、これから議論していく必要がある。

（畑中委員）
with コロナという考え方は、色んな分野でコロナと共存していくということだと思う。PTA の活動についても今までは学校に保護者が足を運んで対面で行うというところがネックとなり活動に参加しにくい面があったが、SNS を使ってできる活動は切り換えていくことになり、そこにも with コロナが見られると思う。
オンラインの活用というのは学習機会の保障として、大変重要なことである。今後 ICT 機器がますます進化していく中で、活用の仕方も変化していく部分はあると思う。今回のようなコロナ禍に限らず、今後起きるかわからない自然災害などの非常時にも対応できる。
家庭でのオンライン学習では、子どもたちの学習環境の違いが浮き彫りになってきた部分もある。端末とその利用環境が整っていても皆と同じように学習に取り組めない環境にある子どもはたくさんいて、その対応に目を向けていくことが大事なことだと思う。
家庭の状況がどのような環境かということ、先ほどの生活調べアンケートの結果にも出てきていると考えられるが、子どもが学校以外の場で学ぶことについて、今一度、保護者がしっかりと考え直すべき時期に来ているように感じる。

（仲林評価者）
選択肢を増やしたとしてもそこからこぼれてしまう子どもたちに目を向けることは、やはり年齢が下の子どもたちの義務教育にとって特に重要なことだと思う。SDGs の根本的な理念は誰 1 人置いていかないというところだと言われている。どれだけアンケートで割合が少ないとしても、そういったところに目を向けて機会の平等を確保しないといけない。

（川村委員）
小中学校の子どもたち全員にタブレットを全て貸与していただいたが、当初はオンライン授業もうまくいかなかったり、子どもたちの不満や教室に行って授業を受けたいという声はよく聞いていたので、今はしっかり授業が受けられて、友達と過ごしている学校生活が復活したのは保護者としても幸せである。
教育長の話にもあったように、コロナ禍の中で必要なもの、そこまで必要ではないもの、こういった形でもできるというものが見えてきて、ここまでしなくてもいいことについてはやらなくてもよいという判断ができた２年半でもあったと思う。親が仕事に出ていて、家で子どもだけでオンライン授業を受けるのが難しいということもよく聞いていたので、もっとよい形の学びを確保できるよう環境が整えばよいと思う。
また、親としてはタブレットだけの授業というのも不安がある。２年半継続する中で、

目への悪影響など将来的に発生しうる問題点が少しずつ出てきており、そういったものも踏まえながら、淘汰できるものと守るべきものを見極めて、学びを深めていく必要がある。

（仲林評価者）
例えばタブレット、パソコンは今までなかったプラスアルファの選択肢であるが、それが唯一になってしまうということでは問題がある。
修学旅行や運動会が根本的に要るかどうかを見直す姿勢、議論の場はとても重要だと思うが、運動会で活躍できる子や、修学旅行になると普段と違って自分の役割がはっきり認識できる子もいる。パソコンの中だけだと、自分が活躍できることが限られてしまうので、走るのが得意だったり絵を描くのが得意だったりする子どもたちに、いかに機会を確保して自己肯定感を高めてあげるかが重要である。正解といえるものはないが、様々に工夫していく必要がある。

（梅田委員）
コロナにより、学校に求められる役割というものが大きく変わってきている。
１つは、学びを止めない体制である。例えば、陽性で欠席した際のリモート対応や学級閉鎖した時の授業配信など、同様のことがあったときには学校として担っていくことが当然のこととして求められる。
さらに、保護者への情報提供がしっかりできるという体制、また保護者の思いもしっかり受け取れるという体制もベースとして求められる。もちろん今までも情報提供や家庭との連携ということは学校に求められてきたことであるが、コロナ禍でも切れずに常に連携していくという仕組みを学校が積極的に持っていることが重要である。
そして、防疫対策をしっかり行い、学校は安全なところだということが当たり前に確保できていなければならない。
これらの体制の上にのってくるものとして、学校が教育 DX に向けた取組を今まさに進めていくため、教育委員会の事務局は様々な情報提供や学校に仕組みをおろしていくという大きな役割を担っている。

（柳澤委員）
コロナにより休校するという場面以外でもオンラインの実践を続けていき、うまくいくようでれば、日常の学びにおいても必ずしも一斉授業型でなくハイブリット型でよいのではないかと思う。
ネット環境でいうと、親御さんが積極的で理解があるかどうか、場合によっては子供だけで自力で使いこなせるかという面のほかに、住民登録があれば当然にセッティングされる電気水道ガスと同様、教育の範囲を超えてネット環境を国家として整備し、その一環で教育を実施できればよいと感じる。
既にネット環境ができているので、むしろ使い慣れている子どもたちを後追いする形になるかもしれないが、家庭、学校、教員が SNS 等を活用してストレートにコミュニティを組むというのも、学校の一つの部分として良いのではないか。

（仲林評価者）
WiFi の整備等がそのいわゆる通信インフラとして公共で整えられるものに入るべきというのは、同意できる。大学では何百人が一斉につなぐので、どうしても重くなってし

まい、カメラを切断して通信量を減らして対応することになる。カメラで見えていると反応が分かるが、全員がカメラを切ったオンラインで質が担保されるのかという問題が出てくる。やはり一定以上の通信を整えるということは、教育だけではなく、国全体の大きな課題でもある。

（橋崎評価者）
必要なもの、必要でないものを見極めていくときに、子どもたち自身が行事や活動など何を大切にしているかという子どもたちの声も判断基準になると思う。

（３）ICT 教育について
（梅田委員）
子どもたちに提供する ICT 教育の全体像をしっかりと噛み砕いて、学校として、それから学年として、クラスとして、１時間の授業の中でどのように実践につないでいくのかを考えていく必要がある。その具体的な取組がそれぞれの学校でうまく進むよう、教育委員会の方では指導主事がしっかりサポートに当たることが大切なことである。
ICT があることによって、子どもたちは、例えば異学年での交流の場ということができない時に、ロイロノートを使って自分たちが伝えたいことを動画に撮るから、それを先生方、それぞれのクラスで流してもらえませんかなどと言いに動いてくる。このように ICT のスキルをつけて活用しようとする子どもたちの姿は、その発達段階において経験してもらいたい中身に繋がってくる。
それぞれの学校で教育委員会が作っている大きな柱となる方向性を具体的にしっかりと議論し、教育委員会としてもサポートしていくことが何より大切である。

評価シート「（３）教育委員会が管理・執行を教育長に委任する事務」について、外部評価者から事前の質問意見のあった評価シート及び評価シート全体に対する意見聴取を行った。

≪意見を求めた内容及びそれらに対する意見等≫

【全体について】
（仲林評価者）
報告書に評価 A～E の目安を掲載してほしい。評価シートによっては、評価の理由と評価との間にずれがあると感じるものがあった。なかなか難しいところではあるが、そういうばらつきのようなものを少なくする調整があってもよい。特に悪い評価についてはマイナスと考えている部分がどこにあるのかを明確にすることが重要である。

（橋崎評価者）
KPI の達成率以外に加味している「総合的な判断」の部分がはっきり分かるようにしてほしい。

【評価シート１１】　こども園、幼稚園、保育園と小学校の連携
（仲林評価者）
特にコロナに限定した話ではないが、就学前の子どもさんを抱えた保護者の不安、心配を、支援窓口に個別につなげる仕組みはあるか。

（教育政策課）
各幼稚園、保育園、こども園の方から、今年度奈良市の方で設置させていただいた子どもセンターに繋ぎ、対応はきっちりとさせていただく形になる。

【評価シート１２】　小中一貫教育、中高一貫教育
（仲林評価者）
導入する前後で成果の検証をしっかりできるように、数値で表せるような指標を意識しておく必要があるのではないか。また、同じ校区であれば、同じ小学校、同じ中学校に通うことがよくあるので、例えば小学校でいじめがあった子がそのままのメンバーで中学校に進学するなど、その集団の中での位置付けのようなものが固定化、強化されるような背景がないかが心配される。

【評価シート１９】　いじめ対策・生徒指導
（橋崎評価者）
ギガスクールでもうタブレットを持っている状態の子どもであっても、SNS によるいじめ相談は 5 年生以上というところが気になった。全員が端末を持っているのであれば、門戸を少し広げていく方向もあるのではと思う。

（教育政策課）
今後、対象年齢を引き下げていくのか、どのような情報モラル教育をしていくのかというところも踏まえて、進めていきたい。

【評価シート２０】　不登校児童生徒への支援
（仲林評価者）
全国と比べて支援につながっている児童の割合が低いように思う。

（教育政策課）
指標をアンケートにより把握しているが、アンケートの文言に影響を受けて実態よりも過小な結果が出ている可能性があり、きちんと数値が取れるような方法を検討したい。

【評価シート２３】　外国にルーツを持つ児童生徒への教育
（橋崎評価者）
日本語指導に非常に限定されているが、総合的な学習等の関連で、異文化理解等に関する支援も実施しているのか。

（教育政策課）
そこまでの支援には至ってないのが実情である。
対象となる子どもの数も非常に増えている中、学校での日本語指導を支援するコーディネーター派遣は 100％実施でき、オンラインで複数の子どもに同時に指導できる機会も確保することで、該当する子供たちには、プラスアルファの学習時間の確保ができたと聞いている。今後も増加傾向が想定されるため、人員の確保とともにオンラインを活用した手厚い指導が必要であると考えている。

【評価シート２８】　学校の経営、運営体制への効果的な支援
（仲林評価者）
仕事を家に持ち帰るなど、教員の働き方について在校時間に表れていない問題があるように思う。外部人材の登用などさらなる検討が必要かと思う。